

第十七章 大逆事件とクリスマス

一 初洋行社員

明治四十四年をむかえて、その一月六日の中村日記は去年の決算の結果を明かにしている。毎年、正月の十日前に定時株主総会をおこない、その時報告書を提出するのは当然だが、損益の数字を明記しているのは、この人の日記としては珍しい。当時の丸善の規模を推察するのに便宜だから転載しておこう。

「一月六日 明治四十三年度諸勘定書成ル総益金二一六、六〇七（円）一三七総損金一四九、九三三（円）七
一三差引利益金六六、六七三（円）四二四ナリ

会社大株主へ四十四年一月定時株主総会へ提出スベキ諸報告及議案、新株式ノ処分外国商況視察員ノ派遣取締役担任事務ノ変更以上ニ付来九日午後二時ヨリ協議会開会スルコトヲ通知ス」

丸善は、外国書および唐物の輸入を専業としながら、正式に社員を外国に出張させたことが、今までなかったとは驚くべきことだが、それで足りたところにその業態の幼稚さ、小ささがうかがえるというより、世界各国に厚い信用があつて、たいいていの用件は書面で事たりたのである。しかし新社屋にうつり、社の商況も俄然大活況を呈して、この必要に迫られたのである。しかもその人選を確定するまでには半年以上かかり、それからの中村日記は、

このことで半ば埋まっているのをみても、これが当時の丸善として如何に目新しい重大事であつたかがわかる。

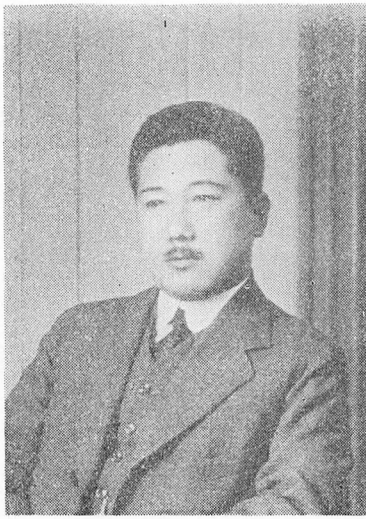
「七月二十三日 午後取締役会ヲ開キ社員精勤休暇ヲ定メ次テ外国出張員ハ松下領三トシ視察区域ハ欧米其順路ハサイベリヤ又ハ印度洋ヲ經テ英国ニ出テ仏独ヲ視察シ夫ヨリ米国ヲ經テ歸朝又ハ先ニ太平洋ヲ經テ米国ニ至リ夫ヨリ英仏独ヲ視察シ印度洋又ハサイベリヤヨリ歸朝費用ハ実費トシ凡三千五百円都合ニヨリ五千円トスルコトヲ得出発期ハ九月末但準備ノ都合ニテ繰上ルコトヲ得視察及研究事項ハ各社員ヨリ申出テシメ協議決定ノコト了テ小柳津要人ヨリ私費ヲ以テ同行致度申シ出ツ」

小柳津専務の同行は、社にとって重大事とあつて結果だれも賛成しなかつたらしい。なお七月二十八日に、福岡出張所設置のため、社員が出発している。ブリタニカ販売のため、タイムズ社の申入れで京都出張所（その後支店

に昇格）をもうけてから、第二番目の出張所である。その後支度金の手渡しや、旅券の交付願いや、送別会や、連日、海外出張員の記事がつづいて、又次の如くある。

松下領三

「十月十一日 松下領三本日午前九時十分新橋発汽車ニテ横浜ニ至リ正午十二時出帆三島丸ニテ英国へ向ケ出立スルニ付同船ニ迄見送り江戸幸ニテ昼食帰途松包（松下包次郎）方ニテ晩食神奈川十時一分発ニテ帰京ス新橋迄見送人ハ松下要（母）末三郎（弟）阿部泰蔵夫妻他同家



々族及親戚会社ヨリ小柳津斎藤金末（金沢末吉）外部長課長仕入課員其他有志ノ者ニテ約三十名三島丸迄見送人ハ要末三郎荒川鈴木阿部夫人及令息小柳津斎藤金末及令息金原早矢仕松下包三郎和田間関等十六名」

この第一回洋行の選に當った松下領三は、前の専務取締役（二代社長）であつた松下鉄三郎の長子で、丸善店員としては珍しく東京帝国大学法学部の卒業（明治四十一年）であり、入社して、書籍部仕入課長の職にいた。

彼が、旅さきの上海、香港、シンガポール、ペナンと通信をよせるたびに、中村はこれを日記に記入しているのは洋行がまだ珍しかったからである。十一月二十七日マルセイユ着、巖窟王のシャトウ・デイクを見物し、十二月六日霧で暗いロンドンに無事到着している。

一一 危ない綱渡り

しばらく丸善一社のことをはなれ、ひろく天下の事情を觀ずれば、この年頭早々、いわゆる大逆事件の兇徒の死刑が実施せられて、去年の夏から正体不明の妖雲が天の一角にかかつていたのが、迅雷の轟きを発して、碎け散じた如き凄惨無残の感じを、全国民の心臓にぶちこんだ。

去年の十月の裁判で、死刑の判決をうけた者は二十四名であつたが、その半数には無期徒刑の恩赦が下つた。

一月二十四日の午前八時から幸徳秋水をはじめに古河力作まで十一人、ほぼ薄暮の午後四時までかかつて絞首台の犠牲とし、紅一点の菅野スガだけは翌日の朝八時に、後を追うた。

新聞紙上では大きな活字が「不倶戴天の国賊」とわめき立てたが、それを書いた記者誰れも本気でそれを信ずる

者なく、以心伝心ですこし見識ある国民はみな疑惑の目をもってこれに對した。

これを打ち消して、無から有を生じた手品を、ほんとうとして信じさせるためには、政府は恥も外聞もなくあらゆる手段を講ずることに狂奔した。社会主義を手もふれるも恐ろしいものだと思ひこませるためには、上野図書館に圧力を加えて「昆虫社会」という本の貸し出しまで禁じたのが、一時が万事で、息もつけぬほど、その取りしまり、その弾圧はきびしいものとなった。たとへ蔭でこっそりとささやきあっても、事がそれにふれるのであれば、警察にしょぴかれたり、注意をうけたりした。

そうになると、まともな発言を避けて、迂回した方法でも、恐いものにさわってみたくなる。研究家の発表するところによると、柳亭種彦が当局の忌諱にふれて死をまねく「戯作者の死」という永井荷風の小説も、封建社会の掟に反撥して一族みな死する森鷗外の「阿部一族」も、大逆事件を反映している小説だそうだ。それはまことに微弱で、鉄の手袋をはめて脈にふれた程度だが、そう言われればなるほどとうなずく。

しかしそんな稀薄な材料より、ここに文学者の反抗として顕著な生ま証拠がある。文学史家が全く見落して語っておらぬが内田魯庵だ。

まず彼は、この年八月号の「学燈」に砂邱子のペンネームで「Oscar Wild の Vera」という一文をのせている。ワイルドという名前から、これも「サロメ」や「ドリャン・グレイ」のような唯美主義的な、デカダン文学かと思つたら大ちがいで、よく彼にこんな作があつたかと疑われる革命劇なのである。まるでロシヤ文学かという錯覚をおこしかねない。

ウェーラというのはロシアの田舎の宿屋の娘だが、兄が虚無党の罪名でシベリヤ流刑になったのに憤慨し、ついに虚無党に投じたところ、計らずも覆面して虚無党に投じきたった皇太子と相思の仲になった。一団はついに皇帝の暗殺に成功し、皇太子が踐祚したので、これを変節漢、裏切者として弑逆する決議をする。ウェーラは新皇帝が固く主義に忠実なことを信ずるので、もし変節したら自分で刺し殺すと誓って、そのむつかしい使命を受け、皇帝の信念が不動なことは確かめ得たが、四囲の切迫した事情に制せられて、自殺してその血ぞめの短刀を、宮庭に待っている同志の中へ投げるという筋である。

ウェーラとは、妙齡の処女の身をもって压制政治の権化の警視總監トレポフを狙撃したウェーラ・ザシュリツチから思いつき、党員の皇太子はクロボトキンが公爵の身として宮廷に仕え、夜はひそかに脱出して地下室の密議に加わっていた経歴から思いついたのではあるまいか。

この劇の第二幕は、皇帝の信用できるのは、「人民は獣で、宮廷高官を威嚇するから、弾丸のつづく限りうち殺すに如かず」という宰相のみである。皇太子の反逆を知ってこれを捉え、皇帝は近衛の兵士をよんで、獄舎に下せと命ずるが、

「いや、いつもこいつも虚無党员で信用できぬ。皇太子を逃がし、反対に朕を鉄窓にぶちこむかも知れぬ」と、恐れて、呼吸の切迫をおぼえ、外気を吸ふため、バルコニーに出たところを、たちまち飛弾が帝に命中し「人殺し、人殺し」と叫びながら幕となる。

魯庵は典籍漫談ののんきな「書齋生活」の連載をやめ、このような劇を、このような時に紹介するとは、とうて

い虚心の筆とは思われず、怒れる虎の髯を逆なでにする危険を冒したものだ。

そればかりではない。丸善は社員の修養のため、前年来の講演会を、まだ毎年隔月ぐらいつづけていたが、中村日記をみると左の如き記事がある。

「十一月十五日 午後六時ヨリ会社楼上ニ於テ講演会ヲ開ク弁士ハ木下尚江氏ニシテ道德ハ平坦ニシテ愉快ナルモノナリ決シテ窮屈ナルモノナラス道德ハ枝葉ノ道德ヲ修メスシテ平坦ナル本体ノ道德ヲ修ムヘク物ニ驚キ物ニ懼ルハ不健全ノ人ナルコトヲ詳論セリ」

一たい丸善は利潤追求を本領とする一商社のくせに、何という危険、何という大胆をおかすのであろう。大逆事件兇徒の処刑ののち幾何もなく、木下尚江を、弁士にむかえてくるとは、ほとんど氣ちがいの沙汰に近い。

木下尚江は、天下青年の渴仰をあつめたことでは、あるいは幸徳秋水以上の時もあつた。信念は火の如く、小説をかいては「火の柱」「良人の自白」など、紅葉の「金色夜叉」以来の大歓迎をうけ、弁舌の妙は当代において泉鏡花の小説とならべて二絶品と云われた。一般にたいする社会主義の宣伝力は秋水をしのいだので、官憲の警戒したことは秋水以上であつた。ただキリスト教の信者であるため、マルクス主義が主流となつていった平民社の動勢と相容れず、幸徳がアナキストとなるにおよんでは、暴力否定の立場から云つても、二人はいよいよ疎隔していった。そのために木下尚江は、大逆事件の連累はあやうく免れたのである。

たまたま母校の早稲田大学雄弁会から講演をたのまれ、彼は「基督抹殺論を読む」という題をえらんだ。これは幸徳が獄中において完成した著作で、発行は不可能視されたが、社会主義や無政府主義には一言もふれず、官僚政

府としてはあんまり好かぬキリストを抹殺したのを歓迎して、奇蹟的にも出版を許可し、一月二十四日の死刑執行だのに、二月一日付で刊行されたところ、政府がどんなに不倶戴天の逆徒と思ひこませようとしても、世間には存外の人気があり、半月にも足らずして十版をかさねた。有名な教授福田徳三は、一つ橋の高等商業学校で経済学を講ずるにあたり、「これキリストを抹殺するならず、その衣をかりて天皇を抹殺せんと試みたる也」と言つたとつたえられている。

そういう読者もあつたのだ。木下尚江は、場所がらも、自分の立場も心得て、キリスト抹殺論は、アメリカ独立戦争の時は祖国イギリスとの宗教的因縁を立ちきるにおいて卓功を奏したが、現代の日本には無意味だと云つてゐる。しかし立論堂々として、たいへん興味の深いもので、彼のエッセイの中でも異色あるものの一つに属する。

これを最後にして、彼は著作に遠ざかり、演壇にも立たず、尾行の刑事のきびしい監視のもとに冬眠状態をつづけ、昭和のはじめ恩師島田三郎全集の刊行にあたり、神田キリスト教青年会の演壇に立つて、往年の雄弁いささかも衰えずと全聴衆を魅了したのは十五、六年目のことである。そのあいだ他にその雄弁を聞かせたことは無いのかのように思われていたが、丸善の記録をみて、その講演会に出ているのは、やっぱり内田魯庵の斡旋であつたろうか。猿猴の群れが、樹上から手足をつないで、水上の鰐魚をからかう絵がある。先頭に立つ猿はいつつかまって食われるかも知れぬ危険があるが、そこにスリルがある。生死すれすれの綱わたりほど緊張するものはない。

「学燈」にあらわれたワイルドの「ウェーラ」の紹介だけでも、ひやひやするのに、その全訳をのせるという大胆この上ない申出をしてきた新聞がある。「東京朝日新聞」だ。

そして憚りもなく「悲劇・革命婦人」と題名をかえ、この年も暮に迫った十二月二十九日から、翌四十五年にかけて、四十七回連載せられて完結となった。この筆者はその当時、早稲田大学高等予科の少年学生だったが、へいぜい、新聞の連載小説などよんだこともないのに、当時絶禁の「タブー」の「革命——」という標題のついているのに注意をひかれ、ことに日ごろから内田魯庵のものを愛読していたので、かりそめに読みだして、たちまち魅了され、案を拍って憤激感奮したこと幾回なるを知らず、ついに切抜をつくって愛蔵した。

これは魯庵として「罪と罰」や「復活」について価値ある名訳だが、何故か単行本としてはついに出版されず、われらの失望にそむいた。政府は魯庵の「復活」訳は、トルストイの名に怖じて発売禁止になし得ず、無害無毒のシェンキーウィッチの「二人画工」にお灸をすえて、江戸の仇を長崎でうったと云われた前歴があるから、毎日毎日のあぶない綱わたりの新聞連載はしても、長くのこる単行本は、禁止を予想して、出版をひかえたのかともとれる。

三 丸善と大逆事件

ここで逆のぼって、政府がこの大逆事件の裁判をいかに隠蔽し、糊塗し、抹消するに腐心狂奔したかを略叙しておくことが無用でない。

この事件の処理にあたった直接の当事者の平沼驥一郎の「回顧録」をみると

「予審をはじめから終結まで八か月ぐらい、大審院の特別公判まで十か月ですんでいる。あんな大事件が十

か月ですんでいる。あの事件については検事総長は総指揮官であるが、途中でチブスにかかったので、私が大審院検事でやった」

あんな大事件が十か月ですんだのは誇りにはならず、反対に粗漏を意味するばかりか、そこに作為の痕跡歴然たるものがある。そして弁護士を花井卓蔵にたのむのに、花井が記録の謄写だけでも一か年にかかるというところ、審判事の潮恒太郎に、ムダをばぶき被告の陳述によってまとめよと命じて、一尺ぐらいのかさに出来ている」といった。この編集の途中においても、勝手自在な手品ができる。正直なものでその点は平沼も

「あの事件で私が深く注意したことは、後になって見ともない証拠を残したくないと考えたことである」といっている。立派な裁判なら証拠をのこす方が名声があがるではないか。のこさぬというのは、うしろぐらい。

事実において、証拠の埒滅には、当局は全力をつくしている。裁判の際には検事総長の松室致が都下の関係のあらゆる新聞雑誌記者を自室によんで、

「どうかこの事件は書いて下さるな」

と哀訴懇願し、保証金もおさめておらぬいわゆる片内新聞のゴロツキ記者にまでていねいに頭をさげた醜態は、後までの語り草になった。しかし弁護士は法律にもとづいて、訴訟記録をうつす権利があり、これを読まなくては裁判はできぬ。しかし法廷は傍聴禁止で、被告二十四人の一々の弁護人が何人であったか今日ではすでに不明だそうである。判決いいわたしの際の十一人の弁護士だけはわかっている。

しかしその記録の謄写も、裁判のすんだ後では、検事局に返付してくれるように要請したが、頑としてこぼんだ

のが高木益太郎と花井卓蔵だ。法律上の権利にもとづき、自費でうつしたものを、返さぬといわれては、いかに権力の強大な検事総長も強要はできぬ。

高木益太郎は司法省と反目して屈せぬ有力弁護士である。官憲のどんな懇願もきかず、自分の主宰する法律新聞に判決全文をのせてしまった。いかなる傍聴禁止の裁判でも判決の云いわたしだけは公開せねばならぬ。その公開されたことを掲載するのだから、これをおさえるわけにゆかぬ。只高木弁護士は判決の証拠証明まではばかる所なく全部かかげた。その中には爆弾の製法が記載してある。それは安寧に害があるという因縁をつけ得るのだが、相手は法律の裏も表も知りぬいた老練家だから、検事総長もおどしがきかず、結局はその法律新聞を発売禁止にし、大衆雑誌とちがって、だいたい配付さきがきまっているから、それを押収して焼きすてさせたので、どこの図書館でも見られぬことになった。ことに花井事務所が大震災で焼け、大逆事件一件書類も烏有に帰して、当局も胸をなでおろした。宮内省が「明治天皇紀」を編纂するにあたって、皆目史料がなくて、困りはてたのである。

しかしそれ程にまで手をつくした埋滅工作も、ついに事実を蔽い了うせる事はできない。ふとした事から真相のつかめる手がかりがつくに至った。それがやっぱり東京朝日新聞と丸善——とは云いきれないが、その顧問の内田魯庵が連携の「火あそび」から端を発したことだから、この社史に書きとめておく因縁が生ずる。

大正七年、朝日新聞は江湖に懸賞小説をつのり、その応募作品のなかに沖野岩三郎の「宿命」一篇があった。幼稚拙劣、尋常の文学一遍倒の選者なら当然、落選とすべき作品で、又じっさい幾人かの選者によって、低い点数しかつけられなかった。只選者の一人に内田魯庵が加わっていた。彼はその小説の取りあつかっている題材が大逆事

件の半面の真相なる点を大いに珍重し、何とかして当選させたいとはかつて、突飛にも九十九点をつけるはなれ業をやつてのけ（この筆者はその時のことを何度も魯庵からきかされた）、沖野の小説は辛うじて二等に当選した。

これによって和歌山県の一田舎牧師は、文士となる端緒をつかんだ。もしこの事がなかったら、大逆事件は、あるいは永久に埋もれるか、少くとも真相の現われるまでに更に多くの年月を要したであろう。

しかし沖野の「宿命」は新聞に連載さるる段になって、さすがに新聞社もその内容のために二の足を踏み、根本的改作を求めたところ、なにしろ素人芸だから拙劣をきわめている。魯庵は一時小説をかいたこともあり、昔とつた杵づかで自ら筆をとって改修補綴し、元の作とは似ても似つかぬものになってしまった。もう土壁を通して鰻の香をかぐにも足らぬほど、大逆事件とは程遠いものになったが、しかし心して読めば隠約として何事かがつかめないこともない。

年月のたつに及んで、老年に近づく沖野は、自分の把握しているだけでも伝えたいと念じ、多くの研究家を見わたり、とくに年少の神崎清が、ブルドックの如きたくましさで、一ど資料に噛みついたが最後、徹底して噛み砕くまでは、決してはなさない逞ましさを知り、連絡したのは昭和十二年の八月、支那事変の勃発した直後である。

「戦争がはじまったし、私が死んでしまえばこの事件の真相が永久にわからなくなる。君は調べることの好きな男だから、なんとかまとめてほしい」

と頼み、神崎は四回、沖野の家にかよって大判四冊のノートをつくった。これが彼の「大逆事件探求の発端」である。しかし神崎の鋭敏な嗅覚は、沖野の話だけでは、その知識見方が甘すぎることに気づき、心がけている中に、当時

の検事総長小山松吉が思想検事にした講演の筆記で、司法省極秘判のある「日本社会主義運動史」を偶然古書展覧会で見つけて購求し、官憲がわの、機密室をのぞき見る思いをした。

それでも戦争中は息もつまる弾圧下で、研究は大して進捗を見なかったが、敗戦と共に官僚の張りめぐらした十重はた重の秘密鉄壁が一時に土崩瓦壊し、期せずして埋没した資料が続々とうかび出て、洪水の如く彼の書齋に流れこんだ。

大逆事件の「訴訟記録」は、民間の担当弁護士所持の分は焼きすても、検事は秘蔵していて、それが終戦と共に巷にながれ出て神崎の手に入った。

自第一冊至第十七冊 訴訟記録写 十七冊

自第一至第九 証拠物写 九冊

まさに二十六冊そろいの完本である。その他彼の手にはこんな物がのこっているとは奇蹟だと思ふような史料にいたるまで細大となくあつまり、じつに病身に鞭打ちつつ三十数年の長い歳月をかけたその調査研究を完了し、「大逆事件記録第一巻」「獄中手記」一巻、「革命伝説」四巻、ほかに小冊子「大逆事件」を著作した。

「獄中手記」の如きは、幸徳秋水、菅野スガ子、新村忠雄、古河力作、森近運平、大石誠之助、成石平四郎、奥宮健之、内山愚童、新村美兵衛、峰尾節堂の十一刑囚が死刑の宣告を受けてから絞首台に上る日までに書きのこした日記、感想その他で珍しくして貴重なることこの上ない。終戦後、官憲が焼却にかかった時、目さきのきいた係員が火炎の中から救い出したのである。

神崎清の諸著は鋭敏卓抜なる見識と、驚歎すべき忍耐の累積とによらなければ出来ぬもので、前人未拓の境地を切りひらいたこういう研究こそ、ほんとうに学士院賞に値すといふべきであらう。

その神崎蒐集のなかに、内田魯庵が大逆事件に関してつくった新聞切抜帖一冊がある。また幸徳以下が所蔵し、獄中でよんだ書物は払下げをうけて、堺枯川が「大逆文庫」と名づけて、その印をおした。

この印判も、今は神崎コレクションの中にあるが、堺利彦から内田魯庵に贈り、さらに一、二人の手を転々したものである。

丸善が大逆事件を忌避せず、むしろこれに同情的態度をとったことは、非難さるべきでなく、その進歩性が賞揚されてよい。しかし内田魯庵はいささか彼等に接近しすぎて、保守的重役の危なげるところとなり、大正に入ると、今までの「献策して行われざるなし」の信用がさめて、急に重要会議への参加からはずされ、社から疎外されてきた様子が見える。

四 逝ける人々

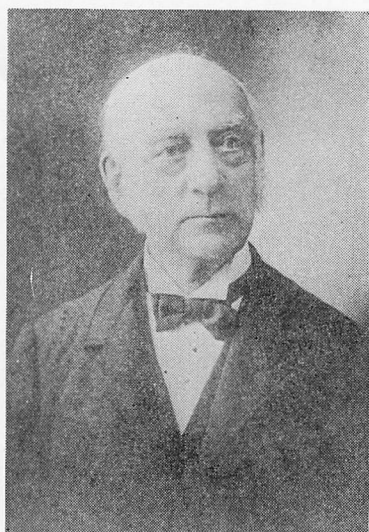
六月号「学鑑」の雑報は「ギルバート逝く」と題して、有名なオペラの「ミカド」の作者の死を報じている。日本の統治者としての代表的な名辞が Tycoon から Mikado にうつったのは、段々に事情が分明してそうなったとしても、グリッフィス博士の大著 The Mikado's Empire (明治九年刊)の功が没却できない。しかしその読者は少数識者にかぎられたが、その「ミカド」の名称を、一般に流布したのは、劇はサリヴァン、曲はギルバートの合

作のオペラ「ミカド」で、たちまち一般にひろがった状況はちょうど我がカチューシャのようで、都鄙を通じ深窓の女性から街頭の学生小僧まで、鼻歌にうたい、口笛に吹いた。日本を愚弄した滑稽歌劇で、そのバカバカしさは問題とするに足らないほどだが、これが作られた日清戦争当時のヨーロッパ人の日本にたいする考えはおよそこんなものであったろう。サリヴァンはこの功によって音楽博士となり、*Sir*の称号をもらった。さすがに日露戦争をすぎ、日英同盟が再締結されると、イギリスは日本に遠慮して、この流行音楽の上演を禁止したこともあったが、いつとはなしにゆるんだ。但しその曲の一部に維新のよりのマルセエーズともいうべき「宮さん、宮さん」の曲譜が取り入れられていることが、早くからわが音楽関係者の注意をひいていたものであった。

「ネルソン以後の第一人者として、もはや今日にては世界に公認せらるる東郷提督の盛んにロンドンに迎えられる時、日本をボンチの集団として、曾我の家以上の悪諺をしくみて世界を笑わしたるこのギルバートの計をきくは、まことに今昔の感に堪えざるなり」

とは断じ得て面白く、なお東郷提督はその前年乃木将軍とともに、海陸軍を代表してイギリスの戴冠式に使節として参列して、ヴィクトリア女王の娘を皇后にむかえ、英皇室とは姻戚関係にあり、威望赫々、世界を威圧したカイゼル・ウィルヘルム二世以上の大歓迎をうけたことを指すのである。

十月号は「ヘボン先生逝く」と報ず。「医学に文学に語学に、実際に日本に残したりし功績の偉大なるは、ヘボン字書（丸善発行「和英語林集成」のこと）に、精錡水に、はた名優田之助の腐骨症の大手術に日本の隅々まで先生の名を知らざるものなきほど汎かりし」と云っている。行年九十六歳。



ヘボン

十一月はアーサー・ロイド博士の訃を報じている。一般には「金色夜叉」や「良人の自白」「独歩集」の英訳者として知られていたであろう。印度のシムラに生まれ、ケムブリッジ大学にまなび、明治十七年宣教師として日本にきて、はじめ慶応義塾のち東京帝国大学の教授だった。

十二月号はアストンの訃を報じている。A History of Japanese Literature の著者として名高い。アイルランドに生まれ、クイーンズ大学に近世語をまなび、通訳生として元治元年に日本にきて、外交官として日本に滞留すること三十年、アーネスト・サトウと、チェンバレンとともに、日本文化通の三英人と併称せられた。

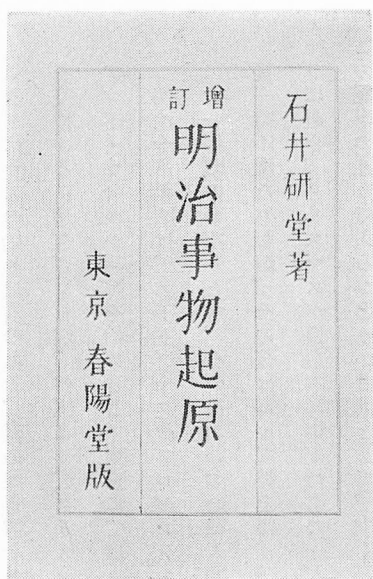
「土佐日記」の英訳その他があり、日本語の口語文典と文語文典の著作があり、ことに日韓同語系であることを論じたのが有名である。芳賀矢一は追悼して語る。

「日本文学史としてまとまった書物のできたのは（内外をひっくるめて）同氏の日本文学史が最初で、明治三十二年の刊行、それまで日本文学といえば世界文学史の片隅の方にわずかに片かな、平かなのことや、平家物語と紫式部の名があがっている位なもので、二、三頁をみたしたにすぎなかったものが、氏の著で初めて、やや詳しく紹介せられ、フランス訳もある」

芝野六助の日本訳（明治四十年七月）は、引用の原文に一々もとの英訳も添え、対照してみるに便利である。

五 クリスマス流行

明治が十二カ月完全に送ったのは、この四十四年をもって最後とする。この間に歳末のクリスマスはようやく一般的行事として、日本の社会に根をおろしかけて来るに到ったが、これは一半はキリスト教の学校のはじめたことであり、他半は丸善その他二、三の商店の売り出しに起因する。こころみに石井研堂の「明治事物起原」（「明治文化全集」別巻の最新版 昭和四十五年刊）をひらいてみよう。幕末の遺老で、風俗史の大家でもあった戸川残花の談話筆記として、次の如き記事がある。



石井研堂著「明治事物起原」（大正15年版）

「原胤昭氏は明治八、九年ごろ銀座の三十間堀河岸へ、原女学校をひらいた。これが日本人が独立でたてた耶蘇教女学校の元祖であろう。もちろん外国の女宣教師が教鞭をとっていて、そのころもう盛んなクリスマスをやったものだ。これが銀座のクリスマスの元祖だった。」

同書はこの談話筆記につづき、著者石井研堂の意見として

「クリスマスの始めは右の如く、真の基督信者のみ打ちあつまりて、日本在来の蜜柑やおこしや手巾前垂などを交換するに過ぎざりしが、外国より、クリスマスについての物品を輸入せるは横浜のケレー商会（ケリー・アンド・ウォルシエ）を始めとし、東京にては丸善を始めとす。

明治十八年頃は、ノートブックやプレゼンテーション・ブックについて、クリスマスカードの輸入は、明治二十一年頃の事なりとす。その後おいおい輸入額も増加し、クリスマス祭も盛んになれり。二十七、八年戦役後一時不況なりしが、その後は却って勢を得、三十四、五年頃の絵葉書流行も手つどうて、一般の趣味ハイカラに赴き、クリスマスが自ら本邦年中行事の一となれるに至れり」

この記事の通りであるかどうかは別として、少くともクリスマスの日本化に丸善が有力な一役を買ったことは何人も異論あるまい。

クリスマスは、キリスト教本来の行事ではない。初代教徒から数世紀にわたって、教祖の降誕を祝う風習は無かったのである。それはヨーロッパ中原のゲルマン民族が冬至を祝う祭典であったのが、ルネッサンス末期のころからキリスト教の行事に入ってきたので、柵の葉やミストウ（鳥の植木といわれる常緑の寄生木）でデコレーションをするのは、ゲルマン民族以来の遺風といわれる。

英語に Christmas という字が初めて現われたのは一五九四年で、十六世紀の最終年、これがその装飾（デコレーション）を意味するようになったのは一八二五年、つまり十九世紀に入ってからである。

クリスマス・プレゼントは初めは主人が僕婢にやることに起源し主としてイギリスで盛んになった風習であり、



クリスマスの絵 (ナシヨナル第二読本)

そのころから英語読本に、クリスマスのことのせられるようになり、福沢諭吉が慶応三年の二度目の渡米からもち帰ったウィルソン読本、それに続いて明治時代全国にわたって広く行われたニュー・ナシヨナル読本などには、共に挿絵までついて、クリスマスの記事がある。イギリスからきたロングマン読本その他には、これがないので、つまり日本にはアメリカ読本がクリスマスの知識を一般にひろく行きわたらせたことになる。

クリスマス・カードは一八四六年に初めて用いられた。日本では足利末期からはいった切支丹が大部分で永禄三年(一五六〇)ノエル(クリスマスに同じ)を催している報告が耶蘇会の通信にあり、出島でもよおされるクリスマスはオランダ冬至と称して、宗教的行事であることが長崎奉行所役人にかくされていた。出島では関係日本人が客として招かれたが、さかんにプレゼントを交換したあとはない。

アメリカでは清教徒の遺風で、クリスマスのような異教徒にもとづく祭典は建国以来禁じられていたが、十九世紀の半ばから、急にさかんになった。サンタ・クロースは古い伝統的行事や伝説にはない。アメリカ人の発明だ。

してみれば、丸善はクリスマスの行事を自家店内から街頭へ流布する前に、アメリカ読本の移入を専業として、全国青少年のあいだに、この知識をあまねく普及した。

云い直せば明治時代も日露戦争ごろまでは、教会とミッションスクールでだけ、クリスマスの讃歌奏楽祈禱がおこなわれ、一般家庭ではたとえキリスト教信者の家でも、クリスマスの行事がなされるという事は稀だった。それが丸善へいってみると二階に天井にまでとどく樅の木が立てられ、五色の豆ランプ、金銀五彩の花緑、厚紙の星などで燦爛と飾り立てられ、そばにはムクムクと着ふとったサンタ・クロースが大きな袋を背負って立っている。

「ははあ、クリスマスというのは、こんなことをするものか」

と思って、記憶にのこる英語読本の文章を思い出し、しばらくほのかな異国情緒を感じて見とれたものだった。

そのころ丸善といっしょに、クリスマス・デコレーションをしていたのは、キリスト教書店の教文館、警醒社、食料品店の明治屋や亀屋などが、銀座日本橋界隈に目立った。

もちろん、日本でも一陽来復の冬至をいわい、歳暮に贈り物をする古来の風習があったから、クリスマスはそれと合体して、異常な発展変貌をしたので、柚子湯に入り、カボチャを食べたのが、洋酒を浴びるほど飲み、ビエロの紙の仮面をかぶって踊り出す狂態にまで変化した。樋口一葉の有名な「通俗書簡文」の「歳暮の文」をみると

「この塩びき鮭ありふれたるものに候へど北海道よりおこせたるまま御歳末お祝ひのしるしまでに御覧に入れ候」

というのが、一つの型を示しているのだが、それが今ではバター・チーズなどの洋食品のつめ合せものか、桐の箱

にはいった図書切手と化けた。その功罪はにわかには断じたいが、「学鐙」の毎年のクリスマスと歳末の売り出し
広告が、若干この潮勢を招来にあずかった責任はまぬかれまい。